スタッフォードシャーブルテリアの歴史

これまで　犬の長所は、特別な仕事や作業をこなすことができることだと考えられ、狩猟や家畜の番、荷物を引くこと、護衛、走ること、パフォーマンスなど数え切れないほどの仕事をさせるように、犬を育ててきました。それぞれの犬の体は、求める仕事に適応され、たとえば狩猟犬は、毛で覆われ、敏感な鼻を持ち、短い体で胸囲は太く、真直ぐで強い足をしています。競走用の犬は、早く走るために長い足に押し上げられたような腹部をし、太い胸囲、鋭い視線、風を切るため長い鼻をしています。護衛犬は、鍛えられた顎と強い気力、大きく太い骨による、本当に重い体をしています。

スタッフォードシャーブルテリアを他の犬と違うものにしている肉体的特長は、その印象的な筋肉質な体、強力な顎と大きな歯、大きく盛り上がった頬の筋肉、弛みのある肩の皮膚、滑らかな背、低い胴、長い前足などです。これらの闘犬やバイティングドッグとしての特徴は、その目的を成し遂げることを可能にしています。このタイプの犬のがっしりとした体格は、雄牛から身をかわしたり、その強い力の顎ですばやく咬み止めたり、振り飛ばされることなく抑えておくために必要なものなのです。

犬の２０倍以上もある雄牛のバイティングにおいては、犬の体格や気質に対する明確な要求があります。ブルバイティング（牛攻め）用のブル＆テリアに求められる気質は、獰猛さや危険覚悟の大胆さなどというものではなく、代わりとして求められるものは、一様な背骨、水平な頭、忍耐強い従順な気質、不屈の勇気と頑強さなどなのです。ブルドッグは、雄牛を止めおいたり、抑えたりすることには優れていましたが、ドッグピットで求められる柔軟性に欠けていました。このため、より小型のブル＆テリアたちは、この課題に挑戦すべく作出されました。

闘犬の起源となるタイプの犬は大型で、体重のある低い胴と力強く発達した頭部を持つマスティフでした。またマスティフは、闘犬ばかりでなく、羊の番犬、セントハウンドやその他の力強い猟犬なども生み出しています。

グレートマスティフ

初期のマスティフの役割は、スパイクやカラーで装甲されて、戦争で人間が敵から身を守るための有効な兵器でした。紀元前２１００年前期には犬は戦争目的に使われていました。犬たちは、戦闘訓練を受け、剣を通さない金属の鎧を着け、スパイクやカラーで敵から身を守り戦うとともに、武器などを運搬もしました。それらの犬は、凶暴で彼らの一人の主人以外は誰も信用しない必要があり、これらの戦闘犬は、その名にふさわしく、好戦的犬族と名づけられていました。

またグレートマスティフは、大型の危険な獲物の猟の時に人間の手助けもしていました。これらの犬は、一般的に群れで狩をし、自然の森の中でバイソンなどを追うために使われていました。また　最も危険な獲物であるイノシシや、高貴な獲物と考えられていた牡鹿

を追跡することにも使われていました。マスティフは、軽快ですばやい犬たちと共同して働き、それらの犬たちがイノシシを疲れさせた後に、力強いマスティフが放されて、獲物を噛み殺しました。今日マスティフは、これらの目的にはほとんど使われなくなりましたが、インドなどでは、マスティがバッファロー、ヒョウ、黒ヒョウ、象などの狩をする派手でおもしろい物語も残っており、これらの実際の真実とは思えないような物語は、スタッフォードシャーブルテリアの先祖であるマスティフの大胆さや不屈さを示しているとも言えます。

ブルドッグとテリアの交配

「ブル＆テリア」という言い方は、一般にブルドッグとそれより小さなテリアとの間の異種交配という意味です。１９世紀中頃のブルドッグは、今日私たちが知っている英国のブルドッグとは似ておらず、現在　私たちがアメリカンスタッフォードシャーテリアやピットブルとして知っている、背が高く長い鼻をした犬により似ていました。初期のブル＆テリアの交配に用いられたテリアは、今日のマンチェスターテリアの先祖にあたるブラックアンドタンテリアや、または、現在のブルテリアの先祖となる絶滅してしまったホワイトイングリッシュテリアでした。これらの初期のブル＆テリアの交配では、闘犬という競技に必要な、より小さく機敏で恐れを知らない犬を作り出すことが求められました。戦争や大きな獲物の猟では、勇敢で恐れを知らなかったより大型のマスティフは、闘技場では成功できませんでした。犬は、小さくすばやくしなやかに適応できなければ、突進する雄牛や他の犬といった敵の中で、駆け引きすることができませんでした。これは、多くのブルドッグの愛好家、特により大きいほうがいいことだと主張する愛好家たちが避けたがる、古くからの課題でした。今日でさえアメリカンピットブルテリアの血統には、１２０ポンドを超えるほど大きなものがいます。スタッフォードシャーブルテリアにおいても、この大きさの問題は、長年にわたって論争となり続けています。

英国のスタッフォードシャーテリア

スタッフォードシャーテリアの先祖は、英国スタッフォード地方「Black　Country」の労働者階級のコンパニオンでした。英国のこの地方では、ブル＆テリアが熱心に飼育され、飼い主たちは、闘犬が禁止された後も長い間、ピットで彼らの犬を戦わせ続けていました。筋金入りのスタッフォードの犬飼たちは、ドッグピットこそが唯一真の犬の価値を試す場だと信じており、そしてこの対戦が、どの犬に繁殖する価値があるかを決めるテストであると考えていました。ブリーダーたちがチャンピョンを決めるのにドッグピットを使うことにより、ゲームはより生死をかけたものとなり、チャンピョン犬だけが闘犬の次の世代を生み出すようになっていきました。

ゲームという言葉は、ブル＆テリアの最も望まれる特質とよく一致しており、ゲームネスとは、犬が死を恐れずに戦い、決して戦いをやめようとしないということを表しています。ブリーダーたちがブル＆テリアに求めたことは、不屈ということでした。今日でも闘犬としてのピットブルは、違法で危険をはらんでいるにもかかわらず、いまだにピットの

中でテストされています。闘犬家たちは、スクラッチという専門用語を使い、犬が戦いの中で何回すくんだか、ピットの外へ逃げ出そうとしたかということに注意を払っています。

１９３０年代まで、英国のブリーダーたちは、スタッフォードシャーテリアとして独立した犬種を確立し、ドッグショーで競い合うということは、考えていませんでした。これ以前の闘犬が違法だった時代には、闘犬はいつものように多かれ少なかれ秘密の慣習とされていました。しかしこの頃　闘犬の活動が警察の介入により実際に廃止され、そして１９３０年から法律が完全に施行され始めました。

犬種を確立しドッグショーに参加するため、ショーの優勝者となったJim　The　Dandy（オーナー；Jack　Barnard、ブリーダー；Joe　Dunn）をベースにして最初のスタンダードが作られました。そのスタンダードは、１９３５年 UK のスタッフォードシャーブルテリアクラブ初のミーティングで承認され、またその年に英国のケンネルクラブにより承認され、犬種としてドッグショーに参加することを認められました。初期のクラブは、４０人を超えるブリーダーにより設立され、Jack　Barnard が初代の会長となりました。

犬たちは、１９３５年６月　「the　Hertfordshire　Agriculture　Society」において初めて紹介されましたが、それはクラブ設立後ちょうど１ヵ月後のことでした。次の年、Cross Guns　Johnson（オーナー；Joe　Dunn）が、有名な「Crufts　Dog　Show」でクラス優勝し、スタッフォード初の入賞者となりました。スタッフォード初のチャンピョンシップショーは、Southern　Counties　Staffordshire　Bull　Terrie　Society により１９４６年６月に開催され、３００頭以上の犬が出陳されました。

しかし　英国 Black　Country に住む草分け的ブリーダーたちは、スタッフォードがドッグショーの世界に進出することを喜びませんでした。彼らは、この犬種の気質が絶滅の危機にさらされ、この犬種の真のハートが失われていくことを恐れ、スタッフォードの血の中にそのハートを保ち続けるために闘犬を続けました。

その後　犬種の望ましい大きさに関する新たな論争が発生し、初期のスタンダードでは、よりポピュラーだったブルテリアの１５～１８インチに近いものでしたが、１９８４年に体高を１４～１６インチと小さくしました。この変更は、多くのブリーダーたちに歓迎されず、今日でもスタンダードの条件の高さを超えるものがいます。

アメリカに渡ったスタッフォード

英国の工業や鉱山の労働者の多くは、１９６０年代と１９７０年代にアメリカへ移民し、彼らのスタッフォードシャーブルテリアをともに連れて行き、アメリカでも飼育し、そのときしばしば他のテリアタイプの犬とも交配しました。これらの犬たちは、やがてヤンキーテリア、アメリカンブルテリア、ピットブルテリアとして知られるようになり、アメリカ社会でも認知され、その犬たちの家族や子供に対する深い愛情が敬愛されました。またこれらの犬たちのほとんどは、アイルランド移民が連れてきた多くの同様の犬のように、闘犬として使われました。The　United　Kennel　Club（UKC）が設立され、これらのピ

ットブルが登録されましたが、より大きなAmerican　Kennel　Club（AKC）には受け入れを拒否されました。AKCは、アメリカンピットブルテリアの認可を認めなかったにもかかわらず、後に　同じ犬をスタッフォードシャーテリアという名のもとに認めました。

初めてAKC認められたスタッフォードシャーテリアは、WheelerのBlack　Dinahでした。多くの愛好家は、この状態を有利に使い、彼らの犬をスタッフォードシャーテリアとして AKC に、アメリカンピットブルテリアとして UKC にと、二重の認可を得ました。１９３６年５月２３日、かつてアメリカン（ピット）ブルテリアやヤンキーテリアとして知られた“The　Grand　Old　Breed”を守るために、The　Staffordshire　Terrier　Club of　Americaが設立され、直ちにスタンダードが作られスタッフォードシャーテリアはショーリングに参加しました。犬種が公開された初めてのアメリカでのショーは、１９３０年代後半に、International　Kennel　Club　of　Chicagoにより開催され、５０頭を超える犬が公開されました。初代AKCチャンピョンの記録は、MaherのCaptain　D.で、１９３７年にタイトルを得ました。

その後、犬種内でのギャップが拡大し、ブリーダーたちは、スタッフォードシャーテリアを二つの犬種に分けることを決めました。１９７２年にアメリカンスタッフォードシャーテリアが認められ、２年後スタッフォードシャーブルテリアが舞台に再登場しました。同じ名前が英国のJoe　Dunnによって１９３０年代に使われていました。スタッフォードシャーブルテリアはより短い足のずんぐりした犬で、体重が２５～３８ポンド、体高が１４～１６インチです。アメリカンスタッフォードシャーテリアは、より足が長く１７～１９インチの体高があります。またアメリカンスタッフォードシャーテリアとして知られるようになったこのタイプの犬は、英国では認められていません。二つの違う犬種として認められたのにもかかわらず、（UKC のアメリカンピットブルテリアを勘定に入れると三種となりますが）これらの犬は、遺伝的には同種ですが、多くの世代間にわたって交配はされていません。

本文は、「STAFFORDSHIRE　BULL　TERRIER」 Jane Hogg Frame著　Kennel Club Books出版のHISTORY OF THE STAFFORDSHIRE BULL TERRIERの項をまとめたものです。もっと詳しく知りたい方は、原本をお読みになることをお勧めします。原本は、美しいカラー写真も多く、それらの写真を見ているだけでも楽しくなります。
ちなみにAmazon．comで￥１９７２です。